

おじいさんの古時計

竹内 李花

「大きな のっぽの古時計 おじいさんの時計…」で始まる歌は、おそろく誰でも耳にしたことがあるだろう。

NHKの『みんなのうた』で紹介され、子どもたちから慣れ親しんでいる。聞かされた懐かしさ、思わず一緒に口ずさまずにはいられない。

私の亡夫は、古時計を収集し、自分で修理するのを趣味としていたので、時計に関わる書物も多い。それをめくっていると大きな古時計が出てきた。

本に付された写真の時計は、高さ2・4メートルの堂々たるもので、屋根形の上には唐草模様彫刻、優美な直線に縁どられた胴体には油絵具で天使やバラの花などが描かれている。

西洋の家庭用時計で、背の高いケースに入った床置時計を、おじいさん時計(グランドファーザー・クロック)といい、もうすこし小ぶりのものをおばあさん時計(グランドマザー・クロック)という。

読み進むと、註に、グランドファーザー・クロックという呼び方は1876年に書かれた「おじいさんの古時計」という歌の中で使われたのが初めてだと記されている。

この曲はアメリカ人のヘンリー・ワークによって作詞、作曲され、当時100万部の楽譜が売れた。近年では、ビング・クロスビーも歌っている。

つまり、この歌が流行したために、それまで長枠時計と呼ばれていたものが、いつの間にかグランドファーザー・クロックというニックネームに入れ替わってしまったのだろう。

日本では1940年に「お祖父さんの時計」として発売されたが歌詞は

原詞とは全く異なった。1962年にNHKのテレビ番組『みんなのうた』で保富康午訳詞、立川清登の歌唱で放送され、広く浸透した。2002年には平井堅がカバーし、オリコンチャート一位を獲得するなど大ヒットし、紅白歌合戦にも出場した。

保富による日本語の歌詞について面白く感じたのは、原詞では「おじいさんが死んだ」という歌詞が何度も出てくるのに、日本語では「死んだ」という言葉が出てこない。90歳で死んでいるのに、訳詞では100歳になっている。

翻訳に携わる私は、興味深く原詞と訳詞を読み比べた。

出だしの「大きな のっぽの 古時計」の部分では、訳詞の方が、まるで語りかけるように旋律とことばの抑揚がぴたりとしていて、むしろこちらが本家本元と言いたいくらいの出来栄だ。

残念なのは、日本語版では3番がばつさりカットされていることである。私の拙訳だが3番は次の通り。

古時計は忠実な召使

いつときも無駄にせず

お給金は、週末にねじを巻くだけ

作者 竹内李花 題名 おじいさんの古時計

山陽新聞夕刊 2019.10.17 掲載